

近代初頭における天竜川下流域の治山と木材流通 材木と伊豆石を巡って

Tenryu River Flood Control Afforestation and Wood Distribution in Early Modern Japan

キーワード：

天竜川
治水、植林
金原明善
木材流通
伊豆石

抄録

本稿は天竜川下流域に残る江戸末期から近代初頭にかけてのいくつかの建築史的遺構を手がかりに、この地域における治水、治水と木材流通、広域的流通によって得られた伊豆石について述べる。社会運動家として知られる金原明善は、天竜川の治水と流域の植林に取り組んだが、これは江戸期以来の木材流通を背景としている。天竜川の要衝であった二俣や掛塚では木材流通とともに、伊豆半島を経由した廻船が伊豆石を持ち帰った。かつての交易を物語る遺構は、川上と川下が結びついた地域環境システムを示している。

はじめに

本稿¹⁾では、天竜川下流域に残る江戸末期から近代初頭にかけてのいくつかの建築史的遺構を手がかりに、この地域における治水と治山の関係、木材の生産と流通、広域的流通の副産物等について述べてみたい。

天竜川は本州の分水嶺に近い諏訪湖を源流とし、浜松市で太平洋に注ぐ。流路延長 213km(日本全国9位)、流域面積 5,090km²(日本全国 12 位)の大河川である。上流域は、急峻な地形で中央構造線に近く、多くの断層が走り、急流であるとともに土砂流出の多い川である。伊那谷を通り、静岡、長野、愛知の3県境をなし、静岡県の佐久間から赤石裂線を二俣まで流れ、二俣を扇頂として広大な扇状地を形成して、遠州灘に至る。

すなわち、二俣までは急峻な山地が続き、二俣より下流では扇状地である遠州平野を流れる。二俣は河口から 25km に位置する。このように急峻な山地から平野へと流れが変わり、その変化が海から遠くはないがやや離れた地点でおこることが天竜川の特徴と言える。図 1, 図 2, 図 3

1. 金原明善の仕事

1.1. 治水への取り組み

浜松市東区安間町に金原明善(きんばらめいぜん)の生家がある。金原明善(1832(天保3)年~1923(大正12)年)は、江戸後期に天竜川下流域に生まれ、治水に尽くしたことで知られる。図 4, 図 5, 図 6

遠州平野に出た天竜川は、近世になるまで流路が定まらず、西の三方原台地と東の磐田原台地との間の低地を流下していた。江戸時代には築堤によって河道が固定されたが、破堤によってたびたび洪水を引き起こし「暴れ天竜」と称されてきた。

このような土地で名主の家に育った明善は、大河川の治水を志す。70歳(古希)を迎えた1902(明治35)年に出版した『経歴及希望』には、「之ガ堰隄防障ノ事ニ関シテハ、殆ド寝食ヲ廢シ心身ヲ盡シタリキ(堤防建設に関しては、ほとんど寝食を忘れるほどに、私は尽くした)」と書いている。

時は明治に移り社会体制も変わり、1872(明治5)年、天竜川御普請専務、翌年川通総取締を浜松県より命じられた後、共同の事業として堤防工事と治水を行うため、天竜川通堤防会社を立ち上げる。1874(明治7)年のことであった。この会社は翌年、治河協力社と改称したが、これについて明善は、「是ニ於テ己レハ家産ヲ挙ケテ其資本ニ供シ、身命ヲ抛チテ其犠牲ニ供シ、此ニ始メテ治河協力社ノ組織ヲ見ルニ至レリ(私は自分の財産を資本に供し、一身をこの事業に捧げ、初めて治河協力社の組織ができた)」と記している。すなわち私財を資本として提供し、一種の会社として巨大な土木工事にあたったのであった。幕藩体制から数年しか経っていない明治初期の日本にあって、この地方における公共事業が確立していないなかで、きわめて先進的な取り組みであった。

金原明善の努力は、やがて中央に聞こえるところとなり、1878(明治11)年の北陸東海巡幸の際に、明治天皇に拝謁した。この出来事は、日本の近代化を進める象徴的存在であった天皇が、地方における一民間人の事業を評したという重要な意味をもっていた。しかし数年後、堤防工事は国または県の直営となり、天竜川下流域各村との紛議も生じたことなどから、明善は1885(明治18)年に治河協力社を解散し、治水事業から撤退した。

1.2. 植林と木材流通

金原明善の『経歴及希望』は、経歴を第一期治水、第二期植林、第三期餘業と分けている。治水事業の後、1886(明治19)年から1900(明治33)年にかけて手がけたのが植林であった。天竜川を遡り、二俣より上流の山間部の官有林に、農商務省の許可を得て300万株の杉檜を植林し、これらは宮内省御料局の土地に編入されたので、帝室に奉獻したという。ここで注目す

¹⁾ 本稿は「木質フォーラム 浜松国際会議」(主催:2018年度木質フォーラムにおける浜松国際会議実行委員会、主会場:静岡文化芸術大学、2019年2月1-4日)において発表した、Tenryu River Flood Control Afforestation and Wood Distribution in Early Modern Japanの日本語版である。英語版の訳出にあたっては、Peter Hourdequin 常葉大学准教授の多大な協力を得た。



図1 天竜川 諏訪湖から浜松まで
(国土交通省ウェブサイトの図に加筆)



図2 明治期の天竜川下流域
(『静岡県管内全図』に本稿関連箇所を加筆)

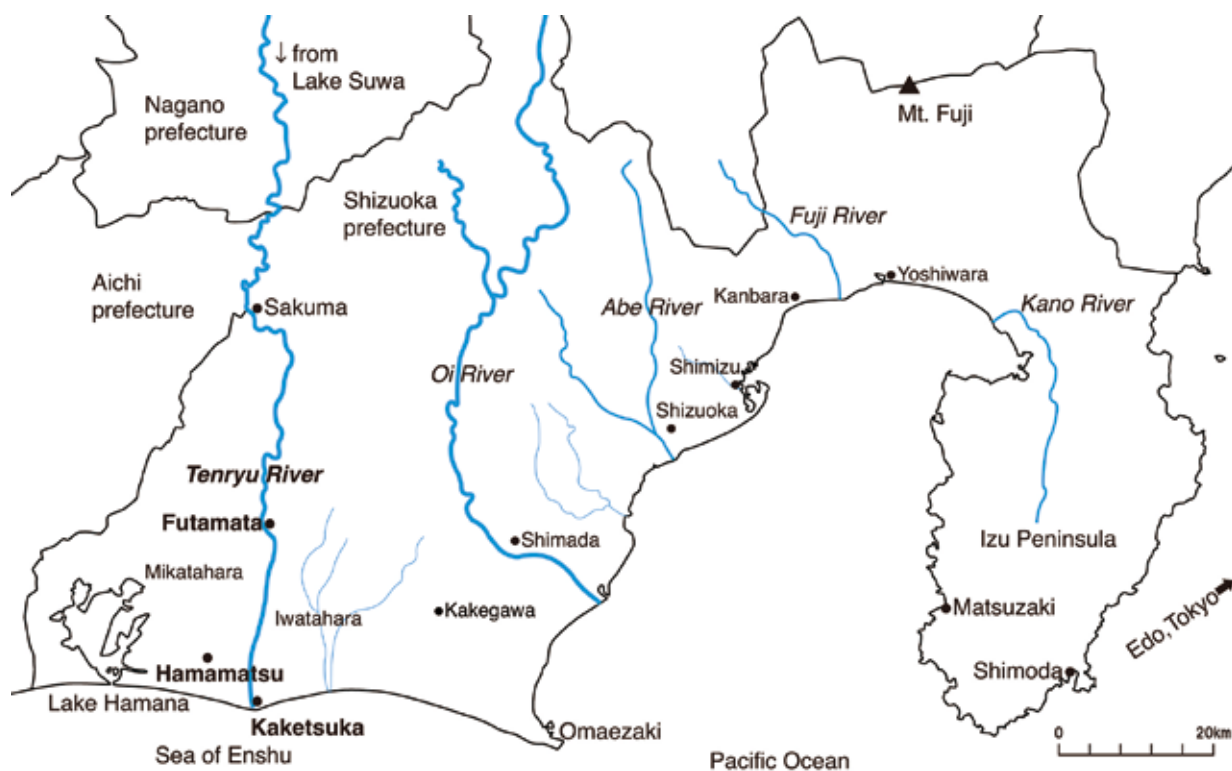


図3 天竜川と静岡県内の本稿関連箇所



図4 金原明善(『財団法人金原治山治水財団史』より)



図5,6 金原明善生家(浜松市東区安間町)

べきは、この事業の目的である。

『経歴及希望』で明善は次のように述べている。「明治ノ昭代ニ於テハ、独リ治水ノミナラズ、水ノ根源タル山ヲモ修治スルヲ得ルナリ、抑モ河ヲ治ムルハ其源ヲ養フニ在リ、源ヲ養フハ山ヲ治ムルニ在リ、樹藝ノ道此ニ於テカ大ナリ（明治時代には、治水だけでなく、水の根源である山も治めることができる。そもそも川を治めるには、その源を涵養する必要があり、源を涵養するには治山が必要であり、そのためには植林が有効である）」

すなわち、治水のために治山を行い、治山のために植林を行った、というのである。これは今日、一般的に知られている治水、治山の関係である。しかし、明善が明治期にこれを考え、特に実践したことは注目に値する。もちろん、明善以前から治水に尽力した人々はいまし、植林を行った人々もいた。しかしこのふたつを結びつけ、しかも実際に個人が行い得たのは、明治期にならなければ体制的に実現不可能であったし、明善という卓越した社会運動家をもってしなければ為し得ないことであつたらう。

明善がこの発想に至ったのは、やはり天竜川下流域に生きていたからだろうと思われる。そこでは川に悩まされると同時に、山が生み出す木材によって、地域の経済が成り立っていたのである。天竜川流域では既に江戸時代から、山間部で伐り出された木材を天竜川河口の掛塚に集積させ、そこから廻船に積みかえて江戸へと運ぶ広域的な流通が確立していた。材木はこの地域において、何よりも収入をもたらす産品であった。文字通り、川上と川下が木材によってつながっていたからこそ、明善は治水と植林を結びつけて考えることができたのである。

近代以前の天竜川流域の木材流通は、異なった条件の場所を考えるとより理解ができる。例えば、浜松と同じ遠州地方の掛川では、やはり林業が盛んだが、そこには大河は流れていない。だから植林は行われても、あくまでも林業のためである。他方、掛川では鉄道敷設以前は木材を広域に流通させる手段をもたなかった。そのため消費も限定的な地域に限られていたと考えられる。また、静岡県内には天竜川の他にも大井川、安倍川、富士川といった大河川があり、上流域には森林資源があるが、これらでは下流域の流路が短く急流すぎることと、増水時と渇水時との水量の差が激しく、また、河口付近に港に適した場所がない。さらに大井川では江戸時代に川越しが行われていたため、筏流しも近代まで禁止されていた。これらに比較して、天竜川は山間部から遠州平野に流れ出て、渇水時でも一定の水量を保っており、河口の中州に天然の港を得ることができた。このように天竜川の特徴が、早くから木材の広域的な流通を可能にし、川上と川下をつなぐことができたのである。

2. 二俣の筏問屋と掛塚の廻船問屋

2.1. 二俣町鹿島の田代家

天竜川は、前述の通り、二俣で山間部から平野へと大きく流れが変わる。その二俣町鹿島（現浜松市天竜区）に田代家住宅が残る。現在の建物は1859（安政6）年のものだが、田代家は徳川家康から朱印状を受け、これによって代々筏下しを取り仕切ってきた旧家である。図7、図8

天竜川とその支流の山間部で伐採された木材は、筏に組まれて川を下り、二俣で広い河原に出た後、河口の掛塚まで運ばれた。また、樽木と呼ばれる板用の短材を流下させ、それを流れが緩やかになる地点で綱を張って遮り、筏に組み直して運ぶことも行われていた。筏による木材の物流は、トラック輸送に次第に替わったが、上流に佐久間ダム（1956（昭和31）年）、秋葉ダム（1958（昭和33）年）ができるまで続いていた。

図9、図10

田代家は、これらの筏の受け継ぎ問屋を営み、この地方における名家であった。特に、明治期には遠州地方の名望家と姻戚関係を結び、人材を輩出した。田代家からは天竜川下流域の竹山家に嫁しているが、当主の竹山純平は第一銀行に勤め、地域でも金融のしくみをつくるなど遠州地方の近代化に貢献した。竹山純平は掛川の岡田良一郎の三男であり、岡田家は大日本報徳社の礎を築いたことで知られる。また、田代家からは竹山家に近い中村家にも嫁しているが、当主の中村與資平は近代の静岡県における最も重要な建築家と呼んでよい。中村與資平は辰野金吾の事務所を経て、朝鮮半島で多くの建築物を手がけた後、遠州銀行本店（現静岡銀行浜松営業部）、静岡市役所、静岡県庁等、今も残る著名な作品を残した。田代家におけるこうした姻戚関係は、地域の大きな資源であった、木材の流通をもとに築かれたネットワークと言えよう。

2.2. 掛塚の津倉家と林家

天竜川河口左岸に掛塚の地がある。現在は磐田市の一部となっているが、昭和期に流路が変更されるまでは中州であった。掛塚は天竜川を下ってきた物資を、太平洋を回漕する船に積みかえる港であり、物流の集積地であった。なかでも木材は最大の産品であり、これが製材されて船に積まれ、江戸・東京まで運ばれた。江戸ではたびたび大火があったので、そのたびに大量の木材需要があり、天竜材は江戸に比較的近い産品として用いられたと考えられる。この物流は、1889（明治22）年に鉄道が開通するまでは大いに発展し、そのピークは明治前半期であったと思われる。掛塚では、多くの木材を扱うため、木挽、大工など、その加工に関わる者も多かった。図11



図 7.8 田代家住宅（浜松市天竜区二俣町鹿島）



図 9 二俣町鹿島の天竜川
ここで流れは山間部から平野部へと変わる



図 10 二俣町鹿島の筏（大正期）
（『天竜川北鹿島の里 田代家物語と二俣城』より）

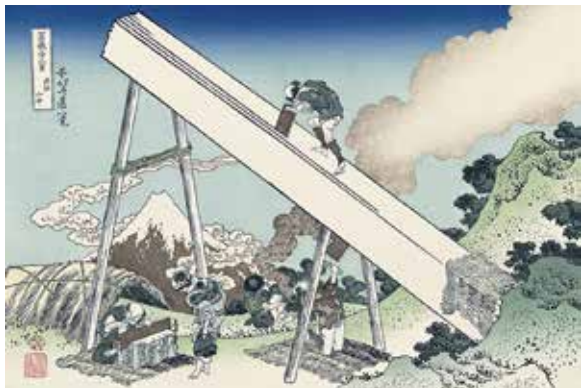


図 11 葛飾北斎「遠江山中」富嶽三十六景
木挽が描かれている



図 12 津倉家住宅（磐田市掛塚）



図 13 明治期の銅版画に描かれた津倉家
（『静岡県明治銅版画風景集』より）



図 14 明治期の銅版画に描かれた林家
（『静岡県明治銅版画風景集』より）

現在の掛塚は静かな集落であるが、かつての中心地の一角に津倉家が残る。津倉家は江戸時代から材木商と廻船問屋を営み、この建物には天竜川を運ばれてきた良材が使われている。1889(明治22)年完成と伝わる建物で、その後まもなく描かれた銅版画とほとんど変わらない姿を保っている。図12, 図13

また、津倉家の近くに、石の塀を巡らせた家がある。同じく材木商と廻船問屋であった林家のものである。林家も同じ銅版画集に描かれていたが、当時の建物は浜松市内の他所に移築されている。図14

林家からは明治期に、遠州平野の中央部、貴布祢(現浜松市浜北区)の平野家に養子が出ている。平野又十郎がその人であり、遠州銀行の源流をつくったほか、金原明善らとともに天竜木材、天竜運輸といった会社を興し、木材加工や流通を会社組織として近代化した。貴布祢の平野家には、1889(明治22)年につくられた新座敷があったが、これをつくったのは掛塚の棟梁であったことが判明している。また、前述した金原明善の生家も掛塚の棟梁が手がけたと見られ、掛塚が、遠州地方における木材加工、木工事拠点であったことがうかがい知れる。図15, 図16

3. 伊豆石の蔵

3.1. 材木の帰り船

金原明善の生家には石でつくられた蔵がある。掛塚の林家にも石の塀がある。これらの石は伊豆石と呼ばれ、伊豆地方で産出された凝灰岩である。図17, 図18

建材としての伊豆産の石は、安山岩系(火山のマグマが固まった石の一種)と凝灰岩系(火山灰などが積もってきた石)に大別され、性質もまったく異なる。金原家や林家で見られるのは凝灰岩系の石である。凝灰岩系の石は、主に下田、南伊豆、松崎など南から西にかけての海岸や河川流域、および大仁、長岡、沼津など狩野川の流域を産地とする。海や川沿いを産地とするのは、船での運搬に便利なためである。石丁場と呼ばれる石切場から、職人が一抱えできる大きさに切り出されたので、はじめから形が揃っていた。凝灰岩系の石は、加工しやすく、軽く、風化しやすいが、それも産地、地層によってさまざまである。安山岩系の石より取り扱いが容易で、広範に流通した。

伊豆半島以外で伊豆石が多く見られるのは、清水の旧市街、吉原、蒲原、静岡、島田などで、特に天竜川下流域が最も多い。この分布は何を意味するのだろうか。それは、廻船の航路と、それから積みかえられた物流である。伊豆の下田や松崎は、江戸・東京への中継港であった。その伊豆との回漕を行っていた港と、その周辺の河川流域に伊豆石の蔵は存在する。すなわち、天竜川下流域における伊豆石の蔵は、掛塚から江戸・東京へ向けて送られた帰り船が運んできたものな

のだ。図3

四角く成型に切られた伊豆石は、扱いやすくかさばらず、そして商品価値のあるものとして流通したと考えられる。伊豆石は、掛塚から運ばれた材木に見合うバラストだったのである。図19, 図20

3.2. 近代都市建設の対価

天竜川下流域における伊豆石の蔵は、浜松市東区、浜北区、磐田市南部を中心に分布し、2012年時点で浜松市全区にわたって120以上の現存が確認された(静岡県建築士会西部ブロックまちづくり委員会による調査)。図21

掛塚では現在でも非常に状態のよい蔵が見られ、東海道の間宿であった天竜川端の中野町にも蔵がある。また、浜松市中心部や笠井など、古くからの市街地にも、今も伊豆石の蔵がある。さらに天竜川を遡って支流の阿多古川筋にもいくつかの蔵がある。ここまで行くと、まさに材木の産地であり、林業を営む家が材木の対価として蔵を建てたことがわかる。図22, 図23

材木と伊豆石の流通が盛んであったのは、幕末から明治前期であったと推測される。鉄道開通以後は、廻船が急速に廃れていったことが理由だが、残存する蔵を見ても、様式的、構法的にこの時期のものが多いようだ。明治期の流行を反映して、アーチや柱頭部の装飾など、洋風建築を意識したデザインも見られる。この背景には、明治の東京や横浜での木材需要があったはずで、天竜の山から切り出され、近代の首都をつくった材木を運んだ帰り船が、材木の集積地に伊豆石をもたらしたのだ。つまり、伊豆石は近代都市建設の対価なのだ。

凝灰岩系の石は、建材としては、そのまま積んで石垣や塀とするほか、一般住宅の壁や蔵などで木造の骨組みの表面に張って用いた。住宅や蔵に用いる最大の利点は防火で、木造の弱点である耐火性能を向上させる役割を果たした。隣家との防火壁の役目を想定している場合もある。日本では一般に木造を耐火する方法として土壁が用いられたが、伊豆石はいわばパネル化された材料として、土蔵よりも工期を短縮できた。

屋敷構えにおける蔵の位置は、主屋の前面にある場合と、背後にある場合とに大別される。前面にある場合は、屋敷の象徴としての意味合いもあり、はじめから見られることを意識した造りといえる。機能的にも変更が少ないため、主屋が建て替えられても蔵は残されることが多い。伊豆石の蔵は、一棟ごとの価値だけではなく、地域的、時代的にまとまった広がりが見られ、点的にだけでなく、ある程度面的に地域の景観を形成する遺産と見ることができる。



図 15,16 平野家住宅（浜松市浜北区貴布祢：現存せず）



図 17 金原明善生家の伊豆石の蔵（浜松市東区安間町）



図 18 林家の伊豆石の堀（磐田市掛塚）



図 19 貴船神社の絵馬に描かれた船
後部に四角い伊豆石が見える（磐田市掛塚）



図 20 貴船神社に 1912 年に奉納された帆船
「石宝丸」の写真（磐田市掛塚）

4. 地域環境システムに基づいた遺産

伊豆半島を産地とする石が、天竜川下流域に建造物として存在する背景には、木材を中心とした、一地域にとどまらない、広域的な流通と環境システムがあった。そして、民家の蔵は、国の命令で行われたような上からの分布ではなく、いわば下からの、地域に根ざした流通によって広がった。それゆえに、各地、各現場での創意や工夫があったはずで、その相違や比較が興味深い。

天竜川下流域に見られる伊豆石の蔵は、近代初頭における、川上の林業、河川の管理、木材の流通、木造建築の構法等が結びついた結果なのである。現在のわたしたちは、100年後にこうした地域環境システムに基づいた遺産を残せるだろうか。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、次の各位にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

金原明善生家、田代家（浜松市）、津倉家（磐田市）

引用・参考文献：

『静岡県管内全図』静岡県,1889

『経歴及希望』金原明善,1902

宮内庁編『明治天皇紀 第4』吉川弘文館,1970

鈴木要太郎『財団法人金原治山治水財団史』財団法人金原治山治水財団,1966

『浜松市史 二』浜松市,1971

『浜松市史 三』浜松市,1980

『静岡県木材史』静岡県木材協同組合連合会,1968

『龍山村史』龍山村,1980

『天竜市史 下巻』天竜市,1988

『磐田市誌シリーズ第十冊 天竜川流域の暮らしと文化 上巻』磐田市史編さん委員会,1989

『ヒューマンティの系譜 田代家ゆかりの人々』鹿島交流振興会,2003

『天竜川北鹿島の里 田代家物語と二俣城』鹿島の里交流振興事業実行委員会

若林淳之監修『静岡県明治銅版画風景集』羽衣出版,1991

『静岡県史 通史編3（近世1）』静岡県,1996

若林淳之『海の東海道』静岡新聞社,1998

『竜洋町史 通史編』磐田市,2009

なお、本稿の第3章は、土屋和男「伊豆石の蔵」『（続）巡検活動の充実にむけて』常葉学園大学共同研究報告書（代表：天野忍）、2013 および「伊豆石の蔵」展のパンフレット（静岡県建築士会西部ブロックまちづくり委員会（土屋和男担当執筆））を基に、再編したものである。

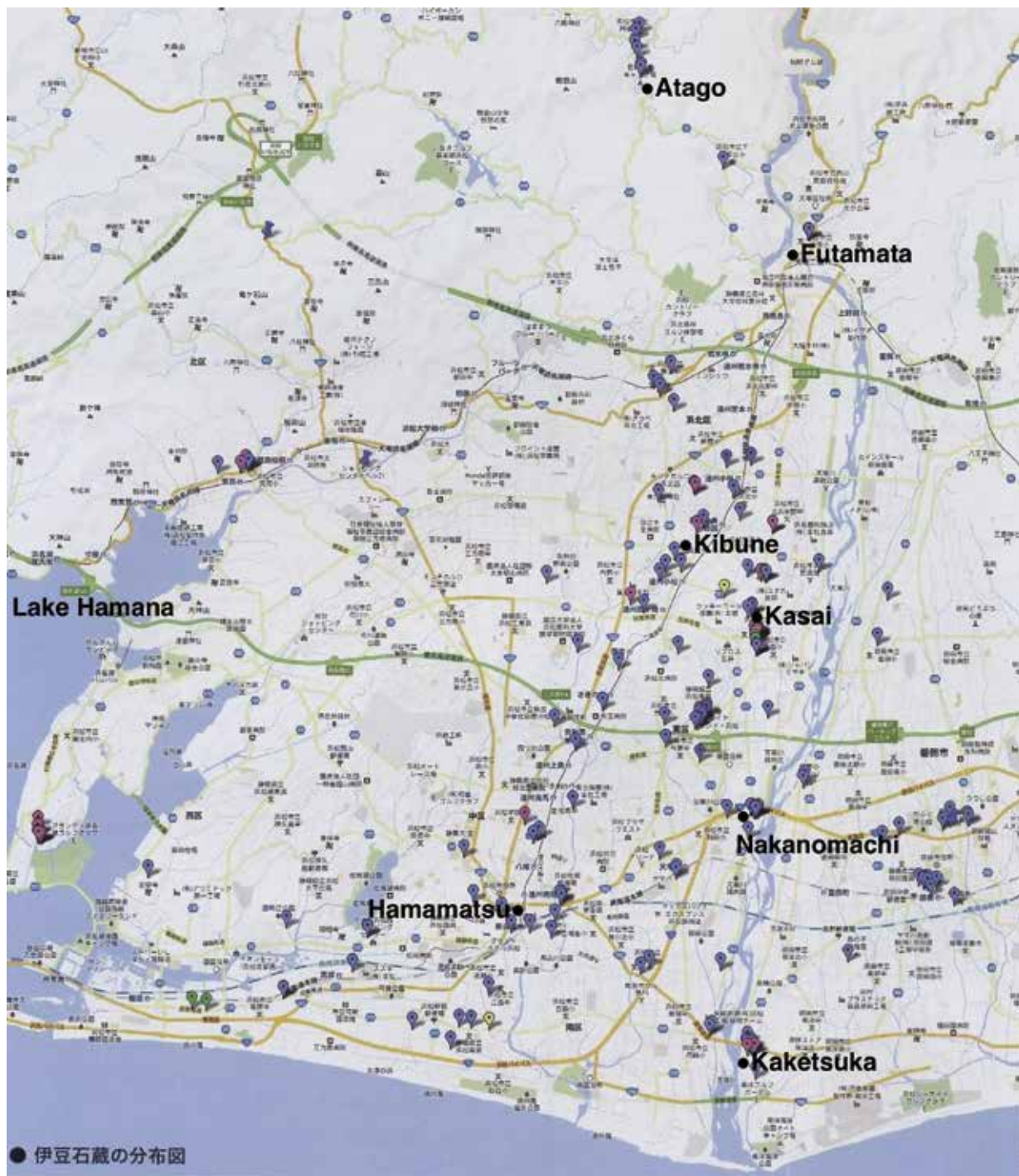


図 21 天竜川下流域における伊豆石の蔵（青いピン）（「伊豆石の蔵」展のパンフレットより）



図 22 伊豆石の蔵（天竜川下流域：浜松市東区中野町）



図 23 伊豆石の蔵（阿多古川流域：浜松市天竜区石神）

